

アートとケア

アール・ブリュットから受けるもの

9

アール・ブリュットとは、
美術教育を受けていない人々が創造する「^き生」の芸術。
心身に障害を持つ作家も少なくない。
あるがままの作家の内なる世界とのやりとりを迫る作品は、
私たちに何をもたらすだろうか。

光さしこむところ アートと医療の交点

英国・ウエルカム・トラスト クリエイティブ・ディレクター
コペンハーゲン大学 教授
ケネス・アーノルド

アートの真髄は、共有する世界へと我々の洞察をいざない展開させてくれるところにある。「アール・ブリュット」と呼ばれる通常の芸術的枠組みから外れた作品群を探っていくと、見えてくる景色の範囲は劇的に広がり、それが可能になる。

英国・ロンドンを拠点とする医学研究を支援する公益財団ウエルカム（Wellcome Trust & Medical Museum & CBMR）の文化的事業であるウエルカム・コレクション¹⁾を指揮する私は、日本人作家の作品だけを特別に集めた「アール・ブリュット展」²⁾を手がける幸運に恵まれた。

私にとって二重の衝撃と言えるのは、第一に、彼らが持つ想像力あふれる創造性の直接的インパクトだ。それから徐々に、風変わりな、ときに息をのむほどに異様な彼らの世界観を照らしだす哀しい光にうちのめされていくのだ。

言葉や言語が優勢を誇る世界において、こうした作品は、直感や感情を正確に捉え描写しようとする私たちの熱い思いを往々にしてはぐらかすようだ。なぜなら、そうしたアーティストたちの多くにとって、通常の——特に書き言葉での——コミュニケーションはきわめて難しい課題だからである。

だからこそ彼らのアートは、その尋常でない生き方だけでなく、そうした多様な福祉のあり方への、これまでとは別の

ゆっくりと燃えるような理解をもたらしてくれるのだろう。彼らの作品は、創造それ自体が活力に満ちた雄弁さを持ちうることを万人に思い出させてくれる格好の教材なのだ。

例えば、齋藤勝利がその絵画を通して共有する世界は、四車線高速の上方に見えるたわんだ外灯柱や、電気パイロンの立つ傾斜地の風景など、移動中の乗り物から垣間見える平凡な景色で構成されている。また桂典之は、測定器や制御機器に興味を惹かれ、その作品には、平凡な土着のこまごましたものと並んでメーターや計器がちりばめられている。その一方で、鮎万里絵はエロチックに彩られた刺激的光景を、自ら描く自家製スクリーンいっぱいに展開している。さらに、河野咲子の「裸の家族」作品群は、一連の等身大の人形として提示され、彼女の人生における大切な人々を表現している。

露出的であり興味をかきたてるこれらの芸術作品は、創造者たちの豊かな個性と生活のありようを、どこまでも彼らが思う姿で披露している。

こうした“アウトサイダー”による描画や絵画、彫刻、テキスタイルでは、アート（芸術）と彼らの豊かな生き方（well-being）が混然一体となって表現される。それはとりわけ、アートと医療の密接で

啓発的な交点を象徴しながらも、唯一無二のものでは全くない。端的に言えば、医療とアートは相互に内包し合うということだ。そうした結びつきは、例えば看護と医療的ケアに、あるいはサイエンスとアートに共通する直観に、あるいは芸術が持つ癒しの潜在力にも明白に表れている。

今、誰もが、コロナウイルス・パンデミックというかつてない事象を生き抜こうとしている。しかしここでもまた、アートは独自の役割を果たす。世界中のギャラリーやコンサートホールが閉館される中、芸術家たちは——プロフェッショナルかそうでないかにかかわらず——単独で作品をつくり、オンラインでシェアする道を探っている。さらに、ソーシャル・ディスタンスによる精神面への悪影響が広がる中、正気を保つためにアートが必要不可欠な存在だと気づくのは当然のことだろう。

私たちは過去の疾病の物語から、多くを学ぶことができる。特に、都市における感染症の歴史や記憶を振り返り新たな流行に備えることは、ウエルカムが2018～2019年にかけて行った国際的プロジェクト“international arts initiative”³⁾の焦点であった。同プロジェクトにおける展示やラジオ番組、ライブイベントなどを通じて、2003年の香港でのSARS、



「無題」

(2011年 技法：ビニールタイ H41×L39×D10 mm) 撮影：大西暢夫

1918年のニューヨークにおけるインフルエンザ・パンデミック、ベルリンにおける人獣共通感染症の影響などを都市間で共同研究することができたのだ。

我々は1936年の発足以来、“感染都市”を支援する健康財団として、医学的研究を支援するとともに、医療の文化的背景を理解することの重要性を認識してきた。これは、独自性の高い研究や発想を育成・支援することで社会の健康増進を図るという、ウエルカム独自のアプローチである。

今、この手法は、新たな世界的課題であるメンタル・ヘルス領域に応用され、

ニューヨーク、ベルリン、バンガロール、東京の4都市でパートナーシップが築かれようとしている。ここでもまた、アートと医療から得られた見識を集約することにより、相互啓発と絆が生まれるだろうと信じている。

(翻訳：星野敦子)

本文註釈

- 1) ウエルカム・コレクションは、医学・医療、生命と芸術のつながりを追求する展示で有名な博物館。
- 2) 2013年に開催された「SOUZOU: Outsider Art from Japan」展を指す。
- 3) <https://wellcome.ac.uk/what-we-do/our-work/contagious-cities>

今月の作家

勝部翔太 Shota KATSUBE

1991生まれ 島根県在住。

高さ3 cm程の大きさで、精巧に作られた小さな戦士たち。素材は、お菓子などを包装する際に口をふさぐために使うビニールタイ。自宅で何百という戦士を作ってきた。一体一体の戦士は、ポーズも武器も配色も異なっている。2013年にウエルカムコレクション(英国)で開催された「SOUZOU Outsider Art From Japan 展」では、出展者の中で唯一、彼の作品が50点収蔵され、現在も常設で展示されている。(解説：小林瑞恵)